

3 人称・単数・通性の代名詞：背景と現状

成 田 圭 市

1. はじめに

よく知られているように、英語には3人称単数で性に関して中立的な代名詞がないため、次例のように不定代名詞に呼応する場合、男性単数 (he) によって代表させるという規範が長い間通用してきた。

- (1) Everyone was very polite and kind to her because he felt sorry for her.¹⁾

ここでのheは男女両性を指すつもりなのだが、実際には多くの読者がこの指示物が男性であると感じるのもまた事実である。その結果、近年では、こうした総称的な男性代名詞の使用が非難されるようになってきている。とりわけ、1970年代以来のフェミニズムの隆盛に伴い、これまで看過されてきた英語に内在する性的な偏りに多くの人々が気付くようになって、言語における性差別解消への意識が高まり、男女両性を含意する単数名詞 (person, reader, studentなど) や不定代名詞 (everybody, someoneなど) に呼応する代名詞として、新たな語法が定着しつつある。

- (2) a. Every student thinks he / he or she / they will pass.
b. Someone left his / his or her / their keys on my desk.

伝統に従ってここにheやhisを使うという立場はもはや維持できないだろう。「太古の昔からheによって総称的に人を表してきた」(O'Conner 1996) のだからheでどこが悪い、といった規範的な通俗的語法書もいまだに存在するが、今日ではこれを許容しない人が大勢を占めており、「古語」と規定する辞書すら出ている。この「規範」を極端に推し進めると、単に性差別的であるのみならず、次例のよ

うに論理的に滑稽な物言いにまで至ってしまう。

- (3) a. Everyone will be able to decide for himself whether or not to have an abortion.
b. Man is a mammal: he bears his young live and suckles them at his breasts.
c. I believe it's strictly a matter between the patient and his doctor.²⁾

これほど極端ではないにせよ、特に節を超えてeveryoneやeverybodyなどに呼応する場合、総称のheがeveryone (everybody) を指すという解釈はほとんど不可能である。

- (4) a. Everybody cheered. I was pleased to hear him. (Jochowitz 1982)
b. Every congressman came to the party, and he had a marvelous time. (Newman 1997)
c. Everyone in the class worried about the midyear history examination, but he all passed. (Bodine 1975)

また、太古の昔からではないものの、6百年も前からtheyが単数形名詞に呼応して使われている伝統にも注目すべきであろう。OEDやGilman (1989), Meyers (1993), Newman (1997) に引用された数多くの実例は、heの使用を要請する伝統的な規範が必ずしも英語の実際の慣用を反映してはいなかったこと、また、そういった規範にもかかわらず母語話者たちは自分の言語感覚に従って言語を運用していること、をはっきりと示している。

以下本論では、こうしたtheyの使われ方を中心に、3人称・単数・通性の代名詞の可能性を探るべく、その歴史的背景・現代におけるその扱い・使用の実態などについて概観し、考察を加えていくことにする。

2. 歴史的背景

代名詞theyが形態的に単数の名詞・代名詞に呼応する現象は、歴史的に見てもかなり古くから見られる慣用である。それが非難されるようになったのは、18世紀の文法家たちがラテン語の文法に則って導き出した一種の擬似的論理に基づいて言語の「正用法」という規範を恣意的に言い始めてからである (Cf. Bodine 1975)。

ごく簡単に歴史を遡ると、OEの時代には現代のフランス語やドイツ語と同様に、生物学的な性とは独立した恣意的な「文法上の性」(grammatical gender)の体系が存在したため、3人称単数代名詞の選択について今日見られるような問題は生じなかった。³⁾ところがMEの時代に入って文法上の性の体系が大方消失し、代わって「自然性」(natural gender)に応じた代名詞の選択が行われるようになると、“Everybody should do his best.”といった呼応に際して男性代名詞を用いるという慣用が生まれてきたものと思われる。これは、多くの文化・社会において男性が女性よりも優勢と捉えられ、言語の面にもその偏りが反映されて、男性形が男女両性を含む無標の上位語となるという傾向の当然の帰結であろう。ただ、注意すべきは、この慣用と相前後して、“Everybody should do their best.”という「単数のthey」を用いた呼応も出現したという事実であり、OEDに引用された文献例によれば、六百年も前から単数のtheyを使う例が見られる。つまり、14世紀以来、「単数のthey」と「総称的男性代名詞」の両方が慣用として並存したことになる。

例えばOEDの“they”の項では、“Often used in reference to a singular noun made universal by every, any, no, etc., or applicable to one of either sex (= ‘he or she’)”と説明されて、1526年の初出例が引用されている。また、“everybody”の項では、以下の例が1530年頃の初出例として挙げられている。

- (1) Everye bodye was in theyr lodgynges.

さらに、“their”の項目を見ると、14世紀初頭のCursor Mundiの例が初出として挙げられている。

- (2) Bath ware made sun and mon, Aiper wit
per ouen light.

再帰代名詞形のthemselvesについては、Abbott (1984)は“The use of they as a sexless singular

has given rise to the word *themselves*”として2例を挙げ、「今世紀中にこの形が容認可能と認められることはないだろう」とコメントしているが、BNC (British National Corpus)を検索すると次例を始め26例もの実例が見つかる。

- (3) ..., but the person involved may justify
themselves by claiming total consistency.
(M. Billig, *Ideology and opinions*, 1991)

ただ、これも英語の歴史を振り返れば、決して最近の新造語ではなく、OEDの“themselves”の項によれば、themselvesという形は1540年頃までは標準的な語形として用いられたものの、1570年頃に消滅し、代わってthemselvesが標準化したとあり、“himself or herself”の意味でthemselvesを用いる例の初出として15世紀後半の文献例が挙げられている。

これ以後、総称的にheで男女両性を代表させる用法と相並んで、「単数のthey」も一つの選択肢として、取り立てて咎められもせず「誤用」との烙印を押されることもなく、脈々と生き続けている。その具体的な使用は、Shakespeareを初め、数多くの英文学作家の作品に見られるとおりである。

ところが、18世紀になって、英文法の発達や英語の標準化の動きに伴い、英語の正用法論や規範主義が台頭し始め、その流れの中で、「単数のthey」が非難されるようになった。Bodine (1975)によれば、「男性中心」の思考に支配された文法家たちの打ち立てた規範が「単数のthey」を誤用として退けているもっとも初期の文献は1746年のKirbyの文法書 (*A new English grammar*) であるという。その後、Lindley Murrayの有名な*English grammar* (1795)において、“Can any one, on their entrance into the world, be fully secure that they shall not be deceived?”という文に見られる呼応が槍玉に挙げられ、“on his entrance”, “that he shall”と訂正されるべき旨が述べられている。もっとも、慣用とかけ離れた規範を説く説教者に往々にしてありがちなことだが、Murray自身も自分の書いた英語において、自らが唾棄した「単数のthey」を使っているとのことである (Wales 1996)。

こうした規範を主張するために文法家たちが用意した根拠は、おおまかには二つに分けられる。一つは、男性の方が女性よりも「優位」であり、女性への言及は男性への言及に従属させられるという、あからさまな「男性優位」思想である。他方、男女の優劣は問題とせず、「総称のhe」は意味的には中立的でありそれ故男女の両方を指すとする考え方

に依拠した文法家もあり、この考え方が今日の規範においても大きな影響力を保ちつづけている。また、男性形によって男女両方を代表させるという規範は、法律の上でも是認されるところとなり、1850年の国会制定法 (Act of Parliament Abbreviation Bill) において、法律の文言短縮のために、以下のような規定がなされ、“man” が “woman” を含み “he” が “he or she” を含むとされた。

- (4) Be it enacted, That in all Acts to be hereafter made Words importing the Masculine Gender shall be deemed and taken to include Females, and the Singular to include the Plural, and the Plural the Singular, unless the contrary as to Gender or Number is expressly provided. (*British Sessions Papers* (1850), cited in Baron 1986)

以上見た規範がこれ以後の伝統文法の手本となり、学校での文法教育においても、文末の前置詞やら分離不定詞やらと並んで、避けるべき構文の一つとして「単数のthey」が厳しく取り締まられるようになるわけである。これがために、教養ある語法としては“Everybody should do his best.”が「正しい」呼応であるとの考え方が定着したのである。

とはいえ、18世紀から今日に至るまで、規範主義が出現する前の時代と同様に、「単数のthey」は多くの作家たちの作品にも、また、教養ある人々の日常会話にも使われ続けてきているのも事実であり、母語話者の言語使用の実態に即していない規範とは何かということが問題になろう。

3. 現在の「規範」

今日、不定代名詞や通性名詞との照応にどのような代名詞を選ぶかについて、明確かつ厳密な規則は存在せず、流動状態にあるといってよい。いまだに伝統的な規範を無批判に引きずった通俗語法書もあるものの、大筋としては、heで男女両性を代表させるという考え方は、既に多くの人にとっては許容されなくなってきた。この傾向は、例えば、学術雑誌への投稿規程などに明示的に「指針」という形で反映されており、かなり以前から、英語教育学雑誌の*TESOL Quarterly*や*ELT Journal*に論文を投稿する場合、事実上この総称的なheの使用は御法度になっている。

言語使用の指針として我々が参照すべき辞書や語

法・文法書の記述も、ここ数十年の間にかんがりの変遷が見られる。今日の流動状態の下で、言語の専門家たちはどのような規範を提出しているのか、以下に概観してみたい。

3. 1. 辞書や語法・文法書の記述

1987年に出たCollins COBUILD英語辞典は様々な面で画期的だったが、その1つが、“he”で男女両性を代表させるという慣用を廃して、辞書の記述に“Someone ... they ...”という呼応を採用したことだった。その前書きで編集主幹のJohn Sinclairは、全ての人に受け入れられるとは思われないが、これを受け入れられない人は現代英語の感覚から若干ずれているとさえ言っている。

この後に出版された学習者用英語辞典のLDOCE (*Longman Dictionary of Contemporary English*) 3版 (1995) もOALD (*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*) 5版 (1995) も、それ以前の版を改訂するに際して、定義文中に単数のtheyを用いた記述を行うようになった。

こうした定義文中での呼応は、当然辞書本文におけるheやtheyの定義にも反映されており、例えば、COBUILD英語辞典の最新版で“they”の項目を引くと、“You use *they* instead of ‘he or she’ to refer to a person without saying whether that person is a man or a woman. Some people think this use is incorrect.”とあり、以下の例文が挙げられている。

- (1) The teacher is not responsible for the student's success or failure. They are only there to help the student learn.

「正用法と認めない人もいる」との注釈はあるものの、“formal / informal”という用法上の区別すら見られず、標準英語としてはっきりと認可されているわけである。OALDの場合、第4版 (1989) では“informal”という但し書きが添えられていたが、同5版 (1995) からはその但し書きも消えて、第6版では、“they”の意味の一つとして「単数のthey」を認めているのみならず、“he”の項で、いわゆる「総称のhe」としての用法を“becoming old-fashioned”と規定しているほどである。LDOCEも同様で、2版 (1987) から「単数のthey」を無条件でtheyの意味の一つとして認めている。また、現代英語の実態を忠実に反映した辞書と謳っているNODE (*New Oxford Dictionary of English*) でも、定義文の記述にCOBUILD辞典と同様の「単数の

they」を採用し、「they」の語法注釈において、この用法が話し言葉・書き言葉のどちらでも近來ますます定着しつつあることを明記している。「総称のhe」に関しては、極端な例では、*Harrap's Essential English Dictionary* (1995) のように、「古語」というラベルを貼った辞書すら出現していることに注目すべきであろう。⁴⁾

一方、語法・文法書の記述に目を転じると、ここでも、当然のことながら、この十数年の間に記述の変化が見られる。規範主義的な語法家たちが従来とってきた態度は、例えば以下の例文について言えば、(2c)のみが正用法で、(2a)は間違い、(2b)はぎこちない (clumsy) というのが、典型的なものであった。

- (2) a. Someone knocked at the door but they had gone when I got downstairs.
b. Someone knocked at the door but he or she had gone when I got downstairs.
c. Someone knocked at the door but he had gone when I got downstairs.

ところが今日では、theyを正用法として認知する態度が、文法記述における文の容認度の違いにはっきりと現れているのである。Quirk et al. (1972) とその改訂版である Quirk et al. (1985) を比べると、以下の文は何れも旧版では「?」が付されていた。

- (3) a. Every student has to hand in their paper today.
b. Either he or she is going to have to change their attitude.

同様に、ESL/EFLの文法書として定評のある *The Grammar Book* の初版 (1983) では以下のような判断が下されていたが、

- (4) a. Everyone / Everybody has his / their own way of doing things. (informal)
b. ?Somebody is driving without their lights.
c. ?Nobody had a good time, did they?
d. ?Has anybody brought a watch with them?

その2版 (1999) では全てOKとされている。同書はさらに、「くだけた話し言葉や書き言葉で」との但し書き付きながら、このtheyの使用を一つの選択肢としてESL/EFLの学習者に提示してもよいと示唆している。また、信頼の置ける英語語法辞典として名高いSwanの*Practical English Usage*も、1980

年の初版では、「特に会話において」という但し書き付きで不定代名詞やpersonなどの通性名詞との呼応にthey / their / themを認めてはいるが、「より堅いスタイルではhe / his / himが普通に用いられる」と規定していた。ところが、その15年後に出版された第2版 (Swan 1995) では、以下のようなtheyの使用を“perfectly correct”と規定し、さらに「堅い書き言葉でも見られる」とすら言っている。

- (5) Dual nationality: if the child possesses the nationality or citizenship of another country they may lose this when they get a British Passport.

ただ、こうしたtheyの使用が現在いまだ流動的で賛否両論があるため、文法家たちの記述が、ある意味で歯切れが悪いのも事実である。「堅い文体においても今後ますますこのtheyが受け容れられていくだろう」(Greenbaum 1996) といった将来に対する展望を認めながらも、一方では、現在のところ「正用法と認めない人もいる」という但し書きや、「主にくだけた口語で」といった条件が付けられることもしばしばである。このまさに流動状態の中で、文法家たちが間に合わせの方便として推奨しているのが、次節で述べるさまざまな回避法である。

3. 2. 回避の方便

上で触れた各種学術雑誌のスタイルシートは、性差別的表現を避けるための指針として、例えば次のような具体的な方便を示している。

(A) 定冠詞theの使用

The speaker must constantly monitor his listener to check that assumptions he is making are shared assumptions. → The speaker must constantly monitor the listener and check that the assumptions the speaker is making are shared.

(B) 複数名詞の使用

Very often the writer does not monitor his arguments very well or get his narrative in the right order. → Very often writers do not monitor their arguments very well or get their narratives in the right order.

(C) s/heの使用

The students do almost all the interacting, the teacher taking a back seat. That is to say, he is not under the

pressure of acting as chairman or host. →
... That is to say, s/he is not under the
pressure of acting as classroom director.

これはTESOL Quarterlyのスタイルシートに示された指針(Quirk 1985)であり、学術論文執筆という特殊な場面に適用されるものだが、より一般的な言語使用の場において我々が日常的に言語を使用する際にも、同様の回避方便が意識的・無意識的に利用されている。

この方便を大きく分けると、一つは、代名詞の使用そのものを避けるというもので、上述の(A)(B)を始め、受動文への書き換え、名詞の反復などの方法が考えられる。もう一つは、heの代わりに他の代名詞を用いるという方便で、you, we, one, s/heやhe or she, heとsheの交互使用、単数のthey、あるいは総称的なsheなどを適宜文脈に応じて用いるというものである。

性差別的な表現に敏感な文法・語法学者が推薦するのは、やはり上述のスタイルシートと同様に、いくつかの方便を臨機応変に使い分けるという折衷案である。例えば言語学者のJean Aitchisonは、その著Linguisticsの第4版(1992)の前書きにおいて、旧版に見られた性差別的表現を避けるように努めたと明記した上で、具体的な方策として、名詞の複数形を使う、不定代名詞や総称名詞にtheyで呼応する、heとsheを交互に使う、の三つを挙げている。同書から、Aitchisonの苦勞の跡がうかがわれる例をいくつか引用してみよう。

- (1) a. Linguists in the sense of linguistic experts need not be fluent in languages, though they must have a wide experience of different types of languages.
- b. If anyone is surprised, they should see how increasingly common this usage is.
- c. The listener would not just think, 'That's impossible', he or she would cast around as to why the speaker had made this comment.

また、今から15年前に言語と性に関する画期的な研究を提示したBaron(1986)も、相手に不快感を与えない表現を望む者にとっては、単数のthey, he or she, 複数名詞による文の書き換えの三つが妥当な方便であろうと結論付けている。

さらに、神崎(2001)は、英米の言語学者たち自

身の書いた英語を観察して、どのような方策が取られているかをごく簡単に紹介している。例えば、Leech & Svartvikの*A Communicative Grammar of English*の初版と第2版を比べると、以下の違いが見られるという。

- (2) a. ... the speaker is uncertain of the truth of what he is asking about.
(1975年初版)
- b. ... the speaker is uncertain of the truth of what he or she is asking about. (1994年第2版)
- (3) a. ... the speaker relies more on the hearer's understanding of context and on his ability to interrupt if he fails to understand. (1975年初版)
- b. ... the speakers rely more on the hearers' understanding of context, and on their ability to interrupt if they fail to understand. (1994年第2版)

これは、20年間の時間的隔たりに鑑みればむしろ当然のこととさえ言えよう。また、神崎は、「男女に公平を期す」用法として、話し手にhe、聞き手にsheを使う著者(例えばBlakemore)、あるいはその逆に話し手にshe、聞き手にheを使う著者(例えばSperber and Wilson)を挙げているが、特に前者の場合、必ずしも神崎の言うような「公平を期す」結果にならないことに注意したい。話し手=能動的な動作主、聞き手=受動的な被動作主という観点から見れば、男女の伝統的なステレオタイプが反映されているに過ぎないからである。

また、フェミニストの中には、従来の総称のheの代わりに、意識的にsheを総称代名詞として使うケースも見られる。例えば言語学者のJulia Stanleyが1975年に書いた論文("Passive Motivation", *FL* 13)から引用してみよう。

- (4) a. From here on out I will be concerned with those uses of the passive that mislead the reader or deny her access to pertinent information.
- b. Either we choose the active voice because it places the speaker in the position of having to accept responsibility for her assertions, or

排他的なheを否定しておきながら、同じく排他的なsheを用いるのは、ある意味では偽善的と評価

される危険性もありうる。

以上、総称的なheを回避する方便をいくつか紹介したわけだが、いずれも一長一短があり、あくまでも過渡的な状況におけるその場しのぎの方便以上の何物でもない。上で触れなかった難点について追加すると、he or sheを始めs/he, he/she, (s)he, him/her, his/herのように代名詞によって両性を明示するやり方は、大方のスタイルガイドでは“correct but clumsy”と評価されており、確かにこれが何度も繰り返されると非常にうるさい感じがするのは否めない。

- (5) If a student does not hand in his or her paper today, he or she will not be allowed to continue the course. (Quirk 1985)

これを避けるため、he or sheとtheyとを併用する例がしばしば見られる。

- (6) In my view, the system of education encourages each school leaver to believe that he or she is entitled to do a job which they choose to do, at the hours they prefer to work, in a location that is convenient to them. (Time)

ただ、厳密さが最優先される学術分野では、この方便が好まれると予測されるし、事実Biber et al. (1999)の大規模コーパス調査結果によれば、he or sheの使用はCONV, FICT, NEWSに比してACADでのものが圧倒的に多いとされている。orによる等位接続形が長くなりがちなので、簡潔さが要求されるNEWSでは好まれず、しかも、ややぎこちない感じがするため、他のレジスターでもあまり使われないのだろう。さらに、Bolinger (1980)も指摘しているように、代名詞一般に求められる音声上の弱形がhe or sheには存在しないことも、CONVのレジスターでの頻度が低い要因の一つと考えられる。

また、he or sheの語順であってshe or heの語順ではないことが、結局は男性側に優位を与えているとの反論も当然予想される。⁵⁾このため、he or sheとshe or heを交替に使用するか、she or heの語順のみを使用するといった方便が実際に行われているが、あまりに人工的過ぎるという印象は否めない。

総称的に使われた単数名詞を複数名詞に言い換えるという方法に関しては、単数形と複数形とで総称の意味が微妙に異なりうるので、言い換えが常に可能とは限らない (Cf. Newman 1997)。

- (7) a. I've canvassed every member of the

LSA and found that linguists love pizza.

- b. ?I've canvassed every member of the LSA and found that the linguist love pizza.

複数総称形 (linguists) は、その類の個々の構成員を指すだけであるのに対し、単数総称形 (the linguist) は、その類としての典型的特徴を意味するため、bはややおかしいのである。ただ、この例に見られるように、複数総称形が生起できて定冠詞付き単数総称形が生起できない環境はあっても、その逆、すなわち定冠詞付き単数総称形が生起できて複数総称形が生起できない環境は存在しないと考えられるので、微妙な意味の差が失われることを除けば、複数形に言い換える方便の支障とはならないだろう。

3. 3. 新造語 (neologism)

上述した回避方法は結局は間に合わせのための折衷的なものであり、決して完璧なものではない。英語の人称代名詞の体系にギャップがある以上、これは致し方ないことであり、この結果、そのギャップを埋めるべく、性差別のない3人称単数代名詞を新たに創り出そうとする試みが現れるのも当然のことである。19世紀半ば以来今日まで、実に多様な形が提案されているという事実からもわかるように、こうした新造語案出は決して1970年代からのフェミニスト運動やPCイデオロギーから派生した最近の動きというわけではなく、既に百年以上も前から、英語の代名詞体系内の欠陥が認識され、それを修正しようとする試みがなされてきているわけである。

新たに作られた3人称単数代名詞を丹念に収集しリストアップしたBaron (1986)によれば、最初の新造語は1850年頃に提案された“ne, nis, nim”だという。それ以後、今日まで提案されてきている数多くの代名詞の詳細はBaron (1986)に譲るが、これを仔細に眺めると、やはり大半が現存する3人称単数代名詞のhe / his / him / she / herを基にして、それをさまざまに変化・混合した型となっていることがわかる。主格について言えば、heesh, hir, sheme, sheehy, hse, eなど、所有格では, hiser, hizer, his'er, hizzer, esといった具合である。このBaronのリスト中からは洩れているが、注目すべきは、言語学者の故Dwight Bolingerが“il”という代名詞を提案していること。ラテン系の形なのは、スペイン語研究者でもあったBolingerであれば当然

であろう。言語形式としてそれほど派手で目立つことのない点や、他の既存の代名詞には使われていない“l”の音を活用している点、さらに、itやyouと同じく主格・目的格が同形で所有格の作り方も同じ(“ils”)という点など、さすが言語学者だけに、よく考えられた代案だといえる。また、最近では、同じく言語学者のHook (1991) が、“he or she”の音形を出発点として、音響音声学の観点から、3 人称単数通性代名詞の音声的具現が [is] となるだろうと予測し、その書き言葉の形態としては“heesh”を提案している。

もっとも、名詞や形容詞などの内容語ならばともかく、代名詞や前置詞のような機能語として全くの新造語が新たに採用されるというのは極めて稀なことであり、どの候補も一般に使われるには至っていない。⁶⁾ 唯一の例外は、特に学术论文などの書き言葉に使われるs/heという形だが、この新造語は、書き言葉にしか使えず、しかも目的格や所有格がないのが大きな難点である。19世紀以来のさまざまな新造語を総括して、Baron (1986) はそれらを“the word that failed”と呼び、“The history of the epicene pronoun suggests that while it may be perceived by some as a needed word, it remains for the language in general an unnecessary one.”と結論付けている。

ただし、英語の代名詞の体系が完全に固定したものであるわけではなく、例えば数世紀前には2 人称複数目的格のyouが2 人称単数主格のthouと2 人称単数目的格のthee、さらに2 人称複数主格のyeに取って代わったという歴史的事実もあり、しかも、この変化は言語的要因ではなく社会的諸要因により引き起こされたと思われる (Gilman 1989)。従って、それと同じような変化が再び英語の代名詞体系に起こらないとは断言できないのである。

また、Baron (1986) 以降の時代の変化、とりわけ、インターネットに代表される新たな伝達媒体の普及に伴い、こうした新造語の採用が、限られた範囲ではあるものの、言わば草の根レベルで活発に行われている点も見逃せない。例えば、M. Spivak, *The Joy of TeX* (1990, AMS) という組版ソフトウェアの案内書では、前書きでその旨を断った上で、全編を通してE / Eir / Emという3 人称単数通性代名詞が用いられている。

- (1) But whatever you do, gentle reader, please do not try to contact the author of this manual. Eir lack of erudition is

amply illuminated by the style so blatantly displayed throughout this work, and attempts at meaningful dialogue with Em are fruitless, as E is merely a pseudonym for a group of intemperate expatriate mathematicians working on the lunatic fringe of typesetting technology. (Spivak 1990: 282)

これとほぼ同じey / eir / emを提案している人もおり、どちらもthey / their / themからthを取り去っただけなので、thonやらheshなどの人工臭のする候補よりもはるかに自然に受け入れられるのではないかと思われる。

また、ネットワーク上では、e(y) / eir / emの他にsie / hir / hir-zye / zir / zirという3 人称単数通性代名詞の使用がある程度まで普及しているという報告もある (Williams 2000)。インターネットという未曾有の強力な条件が加わっただけに、こうした新しい代名詞がじわじわと標準英語にまで入り込んでくる可能性を否定することはできない。「単数のthey」が英語の正用法として完全に定着したにせよ、以下に見られるように、特定の一人の人を指す場合には、たとえその人の性が不明であっても、theyは使用不可だからである。

- (2) a. *If you see Chris, tell them to come back tomorrow.
b. If you see Chris, tell him to come back tomorrow.
c. If you see Chris, tell her to come back tomorrow.
(3) A : I'm visiting my cousin in Connecticut.
B : a. *Where do they live?
b. Where does he live?
c. Where does she live?
(4) A : Do you know a student named Chris Davis?
B : a. *They never came to class.
b. He never came to class.
c. She never came to class.
d. He or she never came to class.
(Newman 1997)

この場合、例えば次のような新造語を使うことにより、性の区別を明示するのを避けることができる。

- (5) a. If you see Chris, tell em to come back tomorrow.
b. Where does ey live?

c. Ey never came to class.

4. 3人称「単数・通性」のthey

本節では、3人称「単数・通性」代名詞として機能するtheyを、それが用いられた具体的な文脈に即して検討し、その使用条件の分析を通して意味論的・語用論的な側面を探ってみたい。

4. 1. 不定代名詞との呼応

もっとも頻繁に見られるのが、everyoneやeverybodyを代表とする不定代名詞との呼応である。特にeveryone (everybody) の場合、その集合的な意味(“all people”)の故に概念的に「複数」と解釈するのが容易なこともあり、theyの呼応に違和感がほとんど感じられない。no one (nobody) も同様である。

- (1) a. “But everyone knows *that*,” said Hermione in a loud whisper. Professor Trelawney stared at her. “Well, they do,” said Hermione. “Everybody knows about Harry and You-Know-Who.” (*Harry Potter 3*)
- b. “If everybody minded their own business,” the Duchess said in a hoarse growl, “the world would go round a deal faster than it does.” (*Alice's Adventures in Wonderland*)
- c. Everybody that hears me sing it—either it brings the tears into their eyes, or else—. (*Through the Looking Glass*)
- d. Each [leader] has recently introduced reformulated versions of their products that require smaller doses. (Meyers 1993)
- e. No one ever lived after he [Voldemort] decided ter kill 'em. (*Harry Potter 1*)
- f. “Wow!” said Dennis, as though nobody in their wildest dreams could hope for more ... (*Harry Potter 4*)

ちなみに、Newman (1994) は、1990-1991にかけてのアメリカのTVのインタビュー番組を取り上げて、そこに現れたスクリプトのない自然な会話約20時間分を調査しているが、そのデータの中に、規

範的な文法・語法書が要求するEverybody ... heといった、形式上単数だが意味的には複数概念を表わす不定代名詞に単数代名詞が呼応する例は一つもなかったと報告している。

肯定文中のanyone (anybody) や、不定関係代名詞whoeverなどに導かれた名詞節も、「どんな～」という意味が複数概念に通じるので、theyとの呼応がごく自然に行われうる。

- (2) a. If anyone finds themselves suffering from much the same symptoms, be warned. (Wales 1996)
- b. When we passed the Clean Water Act, anybody could walk out their door. (Meyers 1993)
- c. “So ... whoever conjured the Dark Mark ...” said Hermione slowly, “were they doing it to show support for the Death Eaters, or to scare them away?” (*Harry Potter 4*)
- d. “Whoever lives there,” thought Alice, “it'll never do to come upon them this size: why, I should frighten them out of their wits!” (*Alice's Adventures in Wonderland*)

someone (somebody) も、意味的には性・数共に不定なので、潜在的に複数の人々に言及しうるし、また、次例のeとfのように総称的解釈に近い場合もあるので、theyが呼応しても不自然ではない。

- (3) a. Someone left their keys on my desk.
- b. Has anybody brought their camera?
- c. Was anyone except Ron and Hermione going to believe him, or would they all think he'd put himself in for the tournament? (*Harry Potter 4*)
- d. “Someone else must've done it.” Ron raised his eyebrows. “What would they do that for?” (*Harry Potter 4*)
- e. You fail to recognize that it matters not what someone is born, but what they grow to be! (*Harry Potter 4*)
- f. No matter how irresponsible or awkward someone has been in the past, you have to give them a chance to prove their sincerity. (Wales 1996)

なお、以下の例でtheyではなくhe or sheが用いられているのは、共起しているeachやsingleが、配分的 (distributive) な意味を強調しているためと考えられる。このように複数よりもむしろ個性が強調されるときには、he or sheが妥当といえよう。

- (4) a. The doctors did note that each of the Riddles had a look of terror upon his or her face. (*Harry Potter 4*)
 b. Every single Hufflepuff had jumped to his or her feet, screaming and stamping. (*Harry Potter 4*)
 c. They found the Slytherins waiting outside, each and every one of them wearing a large badge on the front of his or her robes. (*Harry Potter 4*)
 d. Moody took out a register ... and began to call out names, his normal eye moving steadily down the list while his magical eye swiveled around, fixing upon each student as he or she answered. (*Harry Potter 4*)

同様の指摘が吉田 (1995) にもあり、theyとhe or sheとで新たな意味の分化が生まれていると言える。

- (5) a. Everybody is doing his or her best.
 (各人が個別に)
 b. Everybody is doing their best. (皆が力を合わせて)
 (6) a. Is everyone in his or her place? (一人一人別々の持場を持たされている兵隊がそれぞれの持場についているかどうか)
 b. Is everyone in their place? (劇場で観客が席についているかどうか)
 (7) a. Everyone is having his or her tea.
 (ホテルの泊り客が雨に降り込められて一人淋しくお茶を飲んでいる)
 b. Everyone is having their tea.
 (パーティでみんな一緒にお茶を飲んでいる)

それぞれの例からわかるように、familyなどの集合名詞に見られる2通りの解釈とパラレルな意味の区別が生じているわけである。このような意味の分化が発生したこと自体が、とりもなおさず、theyとhe or sheが一定の市民権を得たことの現われであり、注目に値する。

4. 2. 通性単数名詞との呼応

person, reader, studentなど、男女両性を含意する通性名詞の単数形が先行詞となる場合、いくつかのパターンが存在する。一つは、everyやeachなどの不定形容詞が付いたもので、前節で見た不定代名詞everyoneなどと同様に複数概念と馴染みやすく、theyによって呼応することにさほど不自然さは感じられない。特に、同節要素にならずに節を超えて呼応が起こる場合、伝統的な単数代名詞による呼応はほとんど許容されなくなってしまう。

- (1) a. Every student has to hand in their paper today. (Quirk 1985)
 b. In trying to stop any passing motorist to ask them to telephone for an ambulance ... I was nearly run down. (Wales 1996)
 c. Since each nation is undergoing a crisis, they all tend toward egotism. (*Time*)
 d. When every pupil was in the classroom, the teacher gave them their exam papers.
 e. The headmaster had a word with every pupil before they were allowed to leave the school. (Declerck 1991)
 f. When every passenger's ticket had been checked, the door opened and they / *he all got on. (Swan 1995)
 g. Every student continued in the program, and the results showed that they / *he profited from the experience.

通性名詞が定冠詞または不定冠詞を伴う場合、それが単一の特定の指示物に言及するのではなく、総称的に類概念を表わす意味で用いられていれば、theyによる呼応が自然である。ある類に属するものの全体を提示する働きをするので、複数と解釈するのが容易だからである。

- (2) a. The person buying their own house on a mortgage is buying an appreciating asset. (Abbott 1984)
 b. If you ask the average person on the street what 4-H is, they think it's a rural program for youth. (Meyers 1993)
 c. The best response when a person

cries, some psychologists say, is simply to allow the person to cry or to ask them if they want to take a break. (Meyers 1993)

- d. You can't stop a teacher when they want to do something. (J.D. Salinger)
- e. I can't see Mr. Crouch losing a member of our department and not trying to find out what's happened to them. (*Harry Potter* 4)
- f. The applicant is required to sign their name clearly on page four of this form.
- g. You know what a child needs every time they do something. (Meyers 1993)
- h. Never ask the customer if they did it. (Meyers 1993)
- i. Unless the native speaker imagines a whole crowd of teachers, toddlers or train-drivers, they can only perceive an individual as of one sex or another. (Wales)
- j. The bill states that the court cannot ever deny a parent "reasonable" visitation during any time that the other parent has the child in their custody. (Meyers 1993)

次の(3)の定名詞句は、ある特定の人物を指すという指示的 (referential) な解釈ではなく、名詞句の記述 (「それをした人」) が適用されうる類の一員という属性的 (attributive) な解釈を受ける。パラフレイズすれば "whoever did it" となろう。このため、複数概念との結びつきが可能となり、they による呼応が生じていると考えられる。

- (3) a. I'd be very surprised if the person who did it hadn't been a Death Eater once, even if they're not now. (*Harry Potter* 4)

一方、明らかに特定の個人が問題になっているときにも they との呼応が見られる。

- (4) a. One person in my Penn State audience said they would spend time ... (Meyers 1993)
- b. I've got this attorney who only

brings in business three days a week—their office is underutilized, their secretary is underutilized. (Meyers 1993)

- c. I had a friend in Paris, and they had to go to hospital for a month ... (Swan 1995)

こうした例では、複数概念による意味上の呼応という説明よりはむしろ、男女両性を含意する先行詞に指示する際に性を明示した代名詞を使うことを避けるという配慮が働いていると説明されよう。また、以下の4. 5節で述べる「不確定」の意味も関与していると考えられる。

4. 3. 集合名詞との呼応

audience, committee, governmentなどの集合名詞 (collective noun) は、動詞との一致に関して従来からしばしば論じられている。集合体を1つのまとまりとしてみるならaのように単数扱い、一方、集合体を構成する個々の成員に着目する場合にはbのように複数扱いというのが、伝統的な説明である。

- (1) a. The audience was enormous.
- b. The audience were enjoying every minute of it.
- (2) a. Each couple was asked to complete a form.
- b. The couple are happily married.

こうした数の捉え方は、集合名詞に呼応する代名詞にも引き継がれるので、次例のように動詞の一致と代名詞の呼応の両方で複数扱いされるのが原則である。

- (3) The audience are raising their hands to signify their approval. (Quirk 1972)

また、次のような対比も成立する。ここでのaとbは異なる事象を表しているわけではなく、単に事象の捉え方の違いであり、aは集合体の全体性を、bはその集合内の個々のメンバーをそれぞれ強調しているに過ぎない。

- (4) a. The committee has met and it has rejected the proposal.
- b. The committee have met and they have rejected the proposal. (Quirk 1985)

現代英語の実態をコーパス資料に基づいて分析したBiber et al. (1999:188) は、こうした集合名詞

と動詞の数の一致に関して、単数で一致するのが好まれると結論付けている。また、呼応する代名詞の選択についても、単数形の *it / its* が圧倒的に多いと指摘されている。

興味深いのは、動詞の数と代名詞の数の選択が必ずしも一致しないという点である。次例では、動詞は単数だが代名詞は複数扱いされている。

- (5) a. The committee has not yet decided how they should react to the Governor's letter. (Quirk 1985)
- b. The committee has decided that their faithful followers should be the ones to vote on the club's fate. (Biber et al. 1999)
- c. This audience is going to be very hurried, very busy, a very short time line and as specific as you can be to that. They're only going to pay attention to the thing that looks like a list. (CSPA 7/97)
- d. The class likes the course but they don't like the teacher. (Long 1961)

これはちょうど、不定代名詞は動詞との一致に際しては単数として扱われながら、その代名詞は複数形とするのとよく似た現象である。

- (6) Everybody's doing what they think they're supposed to do.

ただ、不定代名詞と異なり、集合名詞は複数扱いして複数形の動詞と一致できるにもかかわらず、上例では全て動詞との一致では単数扱いとなっている。

こうした不一致が起こるのは、一つには代名詞と先行詞との距離が離れている場合と考えられる。つまり、動詞は通例集合名詞の直後に来るので、形態による一致の要請が強く働いて単数で一致するものの、代名詞は主語の集合名詞からは比較的離れた位置に生じるので、意味的な一致に従って複数の代名詞が選ばれるのはごく自然なことである。ここで見た不一致と逆のケース、すなわち、次のように動詞が複数で一致して代名詞が単数で呼応するという型が見当たらない事実も、この観点から説明することができる。

- (7) ??The committee have met and it has rejected the proposal.

次例も、同節内では *its* を使っているが、距離が離れた第2文では意味的な一致が生じて *them* という複数の呼応が起こっている例である。

- (8) Puzzled but interested, the class got to its feet and followed Professor Lupin out of the classroom. He led them along the deserted corridor and around a corner, ... (*Harry Potter* 3)

4. 4. “A or B” との呼応

or による等位接続は、原理的には「包括的」な意味（「AかBか、あるいは両方」）と「除外的」な意味（「AかBかどうか一方のみ」）とを持つが、日常言語では後者が一般的である。従って、「数」の面から見れば単数と解釈されるはずだが、にもかかわらず、この形式が先行詞となった場合に、*they* による呼応がしばしば見られる。これもやはり、特定の性を明示するのを避けるという配慮に基づいていると解される。

- (1) a. Either he or she is going to have to change their attitude. (Quirk et al. 1985)
- b. It is now possible for any organization man or woman who participates in meetings to determine their success by applying the principles of a new science. (Meyers 1993)
- c. I think a president or governor should be able to count on discretion and loyalty, particularly from people who they put at the very topmost ranks of their administration. (Meyers 1993)
- d. If either a party or a politician wishes to survive, they must use the political process resourcefully.
- e. “It was a skilled witch or wizard who put the boy's name in that goblet.” “Ah, what evidence is zere of zat?” said Madame Maxime, throwing up her huge hands. “Because they hoodwinked a very powerful magical object!” said Moody. (*Harry Potter* 4)

また、まず単数名詞で導入された先行詞が、*he or she* によって指示され、その後、*he or she* の繰り返しを避けて *they* で受け継がれるというパターンもある。

- (2) In my view, the system of education

encourages each school leaver to believe that he or she is entitled to do a job which they choose to do, at the hours they prefer to work, in a location that is convenient to them. (*Time*)

4. 5. theyの使用条件

以上の具体例から明らかなように、形態論・統語論的に単数の先行詞にtheyが呼応する現象が典型的に見られるのは、これらの先行詞が意味的に以下のいずれかの条件を満たしている場合である。

(1) 複数概念

(2) 両性を含む、あるいは性が不明

この二つの条件は、往々にして重なり合うことが多いが、別個の要因として区別するのが妥当であろう。

複数概念の条件にあつては、theyの使用は主に「数」に依存して選択される。集合名詞の場合には伝統的な規範においても複数呼応が許容されてきたわけだが、総称的な意味を表す単数名詞の場合も、特定の単数の個体を表わすのではなく、総称的な類の一員を文法的に具現化することでその類全体を代表させているので、theyがその類に属する成員全部を指し示すという解釈が成り立ちうるのである。また、不定代名詞の中でも、everyone, everybodyなどは意味的に複数と解釈するのがごく自然である。従って、複数概念と結びつく単数名詞・代名詞とtheyとの呼応は、「形態上の一致」ではなく「意味上の一致」が起こっているという統一的な観点からの説明が可能であろう。この場合、複数概念の中に当然両性が含まれるので、「性」の指定は二義的な事柄となり、問題とはならない。両性を含む、あるいは性が不明という上の(2)の条件に当てはまらずに、明らかにどちらか一方の性だけを示しているような先行詞であっても、次のようにtheyの呼応が見られるが、これらの例は、複数概念がtheyの呼応の動機付けとなっていることをはっきりと示すものである。

(3) a. Anyone running a business should consider ... employing their wife. (Abbott 1984)

b. Everybody's grandmother was a teenager when they got pregnant. Whether they were 15 or 16, they ran a house, a farm, they went to work, they raised their children. (*Time*)

c. He would wait outside a business establishment for a single woman to exit, follow them home, then sexually assault them. (Meyers 1993)

d. When you have a friendship with a female, you don't want to ruin it by telling them that you like them. (Newman 1997)

e. You take somebody's mother, all they want to hear about is what a hot-shot their son is. (J.D. Salinger)

f. No girl should have to wear school uniform, because it makes them look like a sack of potatoes. (Swan 1995)

g. You would have to find an incredibly young or rather young girl who'd lost their birth certificate. (SEU, cited in Wales 1996)

h. I swear more when I'm talking to a boy, because I'm not afraid of shocking them. (Swan 1995)

いずれの例においても、先行詞は全て女性のみあるいは男性のみを指しているの、形態上の一致に従ってsheまたはheを用いても良いところだが、意味的な複数に牽引されてtheyの呼応が生じていると説明される。

なお、これらの名詞・代名詞に複数解釈を与える可能性は、絶対的なものではなく、個人差がありうるの、それに応じて、theyで呼応した文に対する容認度も人によって異なると予想される。つまり、それらの名詞・代名詞の「数」の解釈は、単数か複数かという二分法ではなく、その両極の間に漸次的な階層が考えられるのである。例えば、Quirk et al. (1985) で、不定代名詞を先行詞としたものの方が、総称名詞を先行詞としたものよりも、theyで呼応する容認度が高いとされているのもその一例であろう。また、Bolinger (1980) は、以下の例を挙げて、名詞が「定」(definite)になるほど、複数の呼応の容認度が下がると述べている。

(4) a. If anybody wants their phone number changed ...

b. If a person wants their phone number changed ...

c. ?If a man or woman wants their phone number changed ...

d. *If a subscriber wants their phone

number changed ...

これも、複数解釈の可能性と容認度とが連動している一例である。ちなみに、これらの全ての文を Wales (1996) は完全に容認可能と判断している。

次に、「数」に関する漸次的階層の中で、単数寄りの極に近いと解釈せざるを得ないような先行詞を見てみよう。その典型は、文脈中である特定の単数指示物に言及するとしか解せないような名詞である。この場合には、theyによる呼応は、上で見た2番目の条件、すなわち「性」が関わってくる。つまり、複数の解釈というよりもむしろ、性の明示を避けるという配慮が働いているものと解される。

- (5) a. Either he or she is going to have to change their attitude. (Quirk 1985)
- b. Almost one of every two voters said that they believed they would be better off. (Time)

これは、先行詞の性が不明、あるいは両性を含みうるという場合だが、実は性に関しては、先行詞の性別が不明でないときでも敢えてそれを明示しないというケースも存在する。

- (6) a. I was talking to someone about this the other day and they said ah yes. (SEU, cited in Wales 1996)
- b. One person in my Penn State audience said they would spend time ... (Meyers 1993)
- c. I've got this attorney who only brings in business three days a week—their office is underutilized, their secretary is underutilized. (Meyers 1993)
- d. I had a friend in Paris, and they had to go to hospital for a month ... (Swan 1995)
- e. Someone knocked into Harry as they hurried past him. It was Hermione. (Harry Potter 1)
- f. This candidate doesn't know what they're talking about. (Abbott 1984)

これらの例では、先行詞の性が話者にははっきりしていると考えられる。にもかかわらず、特定の性を明示するheないしsheではなくtheyで呼応しているのは何故であろうか。

こうしたtheyの使用については、語用論的な観点から捉え直すべきであるとの指摘がWales (1996)

やNewman (1997) によって為されている。情報伝達の際に、指示物の正体について常にあらゆる情報を伝える必要はないのであり、どの程度の情報を明かすことがある特定の文脈中で関連性を持つのかを決定するのは、結局は話者に委ねられることになる。theyを用いることにより、特定の個人であっても、その人の正体や個性がさほど談話にとって重要ではない、あるいは、特に問題とはならないということが示されるわけである。Wales (1996) はこのようなtheyが「不確定」(indeterminacy)を表わすと規定し、この不確定さが丁寧さを含意する間接的な物言いとなったり、はぐらかした当り障りのない言い方となったりすることもあるとしている。例えば次例などがその一例である。

- (7) Lady Antonia, 60, was careful not to name Worden, merely describing the 'lack of perception' of 'one critic who I'm not very fond of', and commenting 'I'm glad they're not here today'. (Wales 1996)

Walesはさらに、They sayやwhat they callなどの慣用表現、あるいは、次例に見られるような外界指示的なtheyが、まさに数・性共に不確定である点で、ここで扱っている場面指示的なtheyと大いに関連することも示唆している。

- (8) a. In Lagos, they were sleeping in the streets.
- b. They're tearing down a nine-story building just outside my office window.

これはさらにまた、次例のような集合名詞的な解釈とも密接に結びついていると思われるので、theyの機能を統一的に考察する際には見落とせない視点であろう。

- (9) I want a hotel where they serve breakfast.

また、Newman (1997) は、個別化 (individuation) という概念を用いて、単数代名詞の使用は指示物の個別化の度合いを上げるのに対し、theyの使用は指示物の個別化の度合いを下げる働きをすると言っている。個別化という概念は指示物についての話者の視点と関わるものであり、その度合いが高ければ、指示対象そのものが問題にされることになり、一方その度合いが低ければ、指示対象そのものではなくそれが属する類の属性だけが問題にされる。話者の伝達意図との関連で言えば、指示物の正体と個性が談話にとって重要と見なされているか、あ

るいは、その指示物の談話にとっての関連性は単にある類の一員であるということだけかという違いである。例えば次例では、初めに“this person”という個別の人物を導入して“he”で呼応しているが、第2文では、“they”による非個別化の結果、「そういう類の人」という総称的な解釈が得られる。

- (10) I had to decide: Is this person being irrational or is he right? Of course, they were often right. (Gilman 1989)

Newmanは以下のような例を挙げて、theyで呼応されることにより、指示物が個別の実体としてではなく、それが属する類の属性として扱われ、その属性に焦点が当てられていると説明している。

- (11) a. I know a member of this club who, for the obvious reason of being the chairman of the nominating committee, cannot nominate themselves.
b. The person I hate the most in the world told me they would hide my Wheaties.

個別化の度合いが下がるにつれて、指示物についての非断定的な解釈が生まれ、次のような例では、指示物が存在するかどうかについての不確かさを示すようになるとNewmanは指摘している。

- (12) If there is a Barbara Wassman on board, could they make themselves known to the cabin? (Newman 1997)

5. 結論

規範的語法家たちの非難にもかかわらず、単数名詞や不定代名詞にtheyが呼応する事例は、話言葉のみならず書き言葉においてもかなり頻繁に見られる現象である。ただ、本論で挙げた多くの事例からも明らかなように、そうしたtheyを一括して3人称・単数・通性の代名詞と規定することはできないだろうし、また、theyが単数・通性の代名詞として完全に文法化されているとも言いがたい。実際のtheyの使用にはさまざまなヴァリエーションが見られるからである。一方では、「意味上の一致」を介して単数名詞と呼応する例のように、既存の3人称・複数のtheyがそのまま転用されたものもあれば、他方では、通性代名詞が要求される文脈において性の明示を避けるために使われたものもあり、さらには、ある情報を故意に明かさずに不定のままに

しておくような用法も認められるので、現代英語におけるtheyはかなり広範囲の適用可能性を潜在的に有していると仮定する必要がある。「通性」という文法範疇がそもそも存在しない英語において、文法プロパーの問題として、3人称・単数・通性の名詞に呼応する代名詞としてtheyを規則化することは難しいと思われる。

ただし、社会言語学的な問題として捉えるならば、heで男女を代表させるという規範は確実に廃れつつあるし、近い将来完全に消えていくに違いない。そもそも、規範というものは文法体系そのものではなく、言語の使用に対するものでなければならないはずである。3人称代名詞の使用に関しては、従来の恣意的な規範に代わるものとして、適切な言語の使用という観点からのガイドラインを設定することが求められよう。これは、「正しい」とか「正しくない」といった価値判断に基づいて言語の使用を規制するのではなく、「適切さ」という語用論的な視点を踏まえたものとなろう。考慮されるべき適切さは、意図された意味を効果的に伝達するとか曖昧さを避けるとかの純粋に言語的な要因のみならず、社会言語学的な要因、美的要因、倫理的要因などが含まれる。言語共同体の一部の人々に不快感を与えたり、あるいは、一部の人々を排除してしまうようなやり方で言語を使用したりすることを避けるというのも、後者の要因を踏まえた上での規範である。

性差別的な言語の使用をめぐる議論がまず問題にしているのは、言語そのものではなくてその言語を用いて語っている内容であり、さらには、特定の言語表現が表明している考え方である。性差別的な内容（物の見方）を露骨に表現するような仕方では言語を用いるべきではない、というのが既に一致した合意である。この合意に基づいた言語使用の実態が、徐々に言語の文法そのものに入り込みそれに影響を与え、究極的に3人称・単数・通性の代名詞としてtheyが文法化されるということはあるし、また、既にその文法化が行われているという主張をする言語学者もいる。

実際の言語使用におけるtheyの選択については、今日でもまだまだ流動的な状態であり、断定的な結論は下せない。が、少なくとも、何百年も前からheで男女両性を代表させるという規範に従わない母語話者が存在してきたし、現在多くの母語話者が故意にあるいは無意識にこの規範を無視して言語を使用しているというのは厳然たる事実である。今後

の言語使用の実態とその変化を注意深く観察していくことが何よりも肝要である。

註

1. 出典は *Gone with the Wind*, 1940年版。Jochowitz (1982) は、同書を読んでいた自分の娘から、(1)の文が「文法的な間違い」ではないかと指摘されたエピソードを紹介している。そこで1936年初版を調べてみると、問題の箇所は *Everyone was very polite and kind to her because they felt sorry for her.* となっていたという。1940年版の出版に際して、著者ないし編集者が伝統的規範に即して「訂正」を加えたものと推察されるが、一般読者の健全な言語感覚を示す好例であろう。
2. 妊娠中絶についてのハヤカワ上院議員の発言。
3. ただし、文法上の性と自然性との食い違う名詞の場合、代名詞の選択に際して、そのどちらに一致させるかという問題は生じる。例えば現代ドイツ語で「少女」を表わす語は中性名詞であるため、以下の第2文では、代名詞の呼応について二通りの可能性がある。
 Ich habe ein Mädchen gesehen. Sie / Es ...
 Duden第9巻の「ドイツ語の使い方の難しい場合」と題された項では、現在は文法上の性を優先させる傾向が強いが、途中で他の文がはさまって少し離れて代名詞で受ける場合は自然性が多いと説明されている。
 フランス語も同様で、Cornish (1986) は、男性名詞“ministre”が女性の大臣を指す文脈において、男性形代名詞“lui-même”と女性形代名詞“elle”の両方が呼応している事例を取り上げて、指示物の異なる側面に焦点を当てる働きという観点から論じている。
4. 同辞書の“he”の項の2番目の定義は、“he 2 (old) Formerly *he* was widely used to refer to such words as *anyone, someone, no-one, person, child, lawyer*, where the sex was unknown, but *they* or *he* or *she* are now frequently used instead.”となっている。
5. この語順には、man and woman, husband and wife, host and hostess, male or female, boys and girls, brothers and sistersなどに見られる、男性を女性に優先させるという語順の原則が反映しており、Ross (1975) はこうした語順

の決まった表現を「凍結表現」(freezes) と呼んでいる。日本語にも、男女・父母・夫婦・夫妻・少年少女・オスメス・新郎新婦・善男善女・紳士淑女など、同様の原理が働いている固定表現が多い。ただ、僅かながら、ladies and gentlemen, mum (mom) and dad, bride and groom, 雌雄, などの例外もある。

6. その稀有な例の一つが、OEの時代にOld Norseから借用された3人称複数の代名詞they / their / themである。

参考文献

- Abbott, Gerry. 1984. Unisex ‘they’. *ELT Journal* 38: 45-8.
- Aitchison, Jean. 1992. *Linguistics*, 4th ed. Hodder and Stoughton.
- Baron, Dennis. 1986. *Grammar and gender*. Yale UP.
- Biber, Douglas. et al. 1999. *Longman grammar of spoken and written English*. Longman
- Bodine, A. 1975. Androcentrism in prescriptive grammar: singular ‘they,’ sex-indefinite ‘he’ and ‘he or she.’ *Language in society* 4: 129-146
- Bolinger, D. 1980. *Language: the loaded weapon*. Longman.
- Celce-Murcia, M. & D. Larsen-Freeman. 1999. *The Grammar Book*, 2nd ed. Heinle & Heinle.
- Gilman, E. W., ed. 1989. *Webster’s dictionary of English usage*. Merriam Webster.
- Hook, D.D. 1991. Toward an English epicene pronoun. *IRAL* 29: 331-339.
- Jochowitz, G. 1982. Everybody likes pizza, doesn’t he or she?. *American Speech* 57: 198-203.
- 神崎高明. 2001. 不定代名詞・通性名詞の照応. 『英語青年』147巻6号: 48-9.
- MacKay, D. 1980. On the goals, principles, and procedures for prescriptive grammar: singular *they*. *Language in Society* 9: 349-367.
- Meyers, M. W. 1993. Forms of *they* with singular noun phrase antecedents. *Word* 44: 181-192.
- Newman, Michael. 1997. *Epicene pronouns: the linguistics of a prescriptive problem*. Garland.

- O'Conner, Patricia T. 1996. *Woe is I*. Riverhead Books.
- Pauwels, Anne. 1998. *Women changing language*. Longman.
- Quirk, Randolph. et al. 1972. *A grammar of contemporary English*. Longman.
- _____. 1985. *A Comprehensive grammar of the English language*. Longman.
- Ross, John R. 1975. *The Sound of Meaning*. Unpublished MS, MIT.
- Stanley, J. 1978. *Sexist grammar*. *College English* 39: 800-811.
- Swan, M. 1995. *Practical English Usage*, 2nd ed. OUP
- Unterbeck, B., ed. 2000. *Gender in grammar and cognition*. Mouton de Gruyter.
- Wales, K. 1996. *Personal pronouns in present-day English*. CUP.
- Williams, J. 2000. *Gender-neutral pronoun FAQ*. Unpublished MS.
- 吉田正治. 1995. 『英語教師のための英文法』. 研究社出版.